

好機もいつかは時勢の移り変わりにより訪れるはずだ」と強く自分自身に納得させようとしている。その心情の表出として「莫言」の語をとらえてみたい。この語は何かを否定しようとする道真の偽らざる叫びの声の露呈と考えられる。(中略)八句目の「戸を墮り寒気に備えている虫」の存在は、実は道真自身のことではないのだろうか。言い換えると、讃岐守として京より隔絶された状況に置かれている道真の心情は「冬の虫」のそれと思われる。だからこそ、「莫言」と否定せざるを得なかったはずである。暦の上では今日から春なのだ。外界はこれ以降一歩一歩春の気配を強めていくに違いない。自分の状況だってわかりだ。と信じようとする心情の現れとしてこの第八句を見れば、前の句の意味するものも明らかに becoming するものと考えられる。

この道真の心情は裏を返せば、京へ戻る日をひたすら待ちわび希求する切実な願いであり讃岐生活を余儀なくされている現状への苛ちとも思われる。(注5) (十六～十七頁)

一方、この詩について最近、注目すべき解釈を公にされている前掲の隋氏は句毎の詳細な考察ののち、「道真が讃岐時代の自身の生活状況を「閑客」の時期、「失道」の時期と位置づけていることは自作の中に述べたとおりである。「失道」は「詩臣」の勤めが果たせなかつたことを指す言葉であり、「閑客」も自分の理想的な生き方ではない状態を意味する言葉である。その悶々たる日々の中で、彼を終始支えてきたのは、任期を終えた後、再び詩臣として中央に出仕できるという希望である。その苦悶と希望が混じった複雑な心境が、「立春」詩において、巧に詠出されたのである。」(注4) (三十五頁)と結論付けられている。

ここで、「492元年立春 十二月十九日」の作品に戻る。隋氏が、既に載せた「278立春 在十二月廿六日」との